

II. 「すがたかたちも大切だと思います」

—— 観用少女（ときにいくばくかのあざとさや媚態を込めて）

当然のことながら、描かれた少女たちの魅力は、まず第一にその「すがたかたち」の美しさ・かわいらしさにあります。

江戸時代から現代に至るまで、日本美術の中には、豪華な衣裳をまとった舞姿や、年中行事などにあわせたきれいなおめかし、あるいは物売りの出で立ちや異国の装いを身にまとう今で言う「コスプレ」など、さまざまな姿の少女に着目した作品が見られます。これら、いわば見られるために描かれた少女像は、時を超えて私たちの心をつかみます。

この意味で、少女を描いた商業ポスターは、ある時代のある層にどのような「すがたかたち」の少女たちが好まれたのか、社会の視線を探る格好のバロメーターとなりえます。

また、ときに時代を大きく隔てた作品同士に、時を超えて重なり合う「すがたかたち」を発見することがあります。たとえば江戸時代の絵師・鈴木春信の描いたくなくねすらりとした少女像は、大正から昭和にかけて人気を博した松本かつぢの描く娘さんたちのポーズにどこか通じるところがあるようです。

球体関節人形やフィギュアといった立体造形は、「見られるための少女」の極北と言えるかもしれません。そこは、独特の文法に基づく誇張表現ときわめて高度な技巧が展開される一種のマニエリスムの場であり、「『見ること』の政治性」というアートの本質的な問いが先鋭的なかたちで提示された刺激的なフィールドとなっています。

そして、そのような場にときおり降り立つ異形の少女たち。もしかしたらそれは、「見られ続けてきた」彼女たちのひとつの反乱のかたちなのかもしれません。

ここではあえて「観用少女」という耳慣れないことばに託して、こういった視覚文化の本質的問題を考えていきたいと思います。

